

スマホネイティブ世代に必要なパソコン教育について（その2）

川喜田 多佳子

高田短期大学キャリア育成学科

寺家 尚美

三重県立津高等技術学校 OA 事務科

1. はじめに

スマホネイティブ世代は、日常生活の中心にスマートフォンがあるといっても過言ではない。テレビを見るより、スマートフォンで好きなコンテンツを好きな時に見る、新聞や雑誌を読むより、スマートフォンで必要なニュースや情報を閲覧する、他人とのコミュニケーションにもスマートフォンを利用する、買い物もスマートフォンでネットショッピングをする、というように、スマートフォンがあれば必要なことがなんでもできてしまう状況にある。スマートフォンはネット検索や SNS 利用による情報伝達、さらには文書入力も行うことができる。さらには画像・動画編集まで可能となれば学生生活を送る上では何の不自由もないマルチな便利ツールである。しかし、仕事においては、やはりパソコンスキルが重要となる。本学オフィスワークコースでは、地元企業での就職を目指している学生が大多数を占めるため、仕事での即戦力となる人材を育成しなければならない。そのためにはキーボード操作を要としたパソコンスキル、特に Word・Excel の活用スキルを身につけておくことが重要となる。入学前タイピング課題に始まり、入学後の授業からは学業だけでなく仕事で使うためのパソコンスキルの向上に力を入れている。ビジネスに即した課題をたくさん実践させることで、仕事におけるパソコンの重要性を理解させ、また、ファイルの保存や編集を繰り返すことで、スマホネイティブ世代に対してのパソコンの利便性向上意識を高めることも狙いとしている。

2. 現状

平成 30 年 1 月、本学オフィスワークコース 1 年生を対象の授業「Web デザイン」14 回目において、パソコンとスマートフォンに対する意識アンケートを行った（クラス回答者 29 名）。「スマートフォンとパソコンのどちらが得意か」という質問に対し、スマートフォンの方が得意と答えた学生が約 7 割いるという結果となった(図 1)。その理由は表 1 のとおりであった。この時期、個人差はあるもののほぼ全員の学生が指示された課題を仕上げる力はある。授業内ではパソコンの有用な利活用方法を教授し、その重要性を実感できるようにするため、教授した方法を活用し、多くの時間をかけないと完成できないような課題も課した。これには、課外

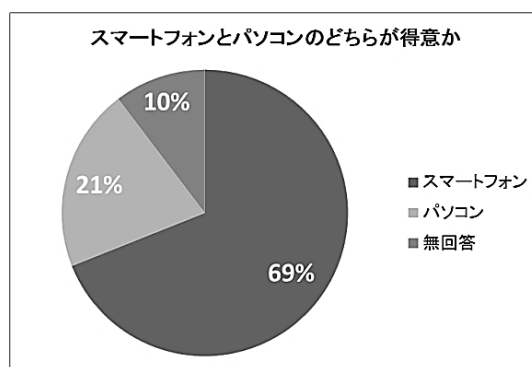


図 1 パソコン・スマートフォンに対する意識

表 1 スマートフォンの方が得意な理由

- ・文字入力を打つのが早いから。
- ・普段使う時間がパソコンより長いから。
- ・パソコンは難しいから。
- ・手軽だから。
- ・操作が簡単だから。
- ・パソコンは授業では操作できるけど、一人では操作できない。
- ・スマホは指1本でよいが、パソコンはマウスで反応させなければならないのが大変。

学習時間が増えるようにとの意図もあった。パソコンスキルを身につける事への重要性やスマートフォン依存意識、さらにはパソコンの利便性意識が高まることを期待していたが、スマホ依存とパソコンに対する苦手意識を変えるまでには至らなかった。しかしながら、パソコンが得意と答えた 21% 学生からの意見は、学業を熱心に取り組み、入学前には知らなかったパソコンの利便性を実感し、パソコンの経験値が増えた学生から出てきた意見ではないかと推

表 2 パソコンの方が得意な理由

- ・画面が大きいの、キーボード入力に慣れスマホより使いやすく感じるようになった。
- ・調べ物をしたり、文字量の多い資料をまとめる作業からパソコンが良くなってきた。
- ・文字入力は、短大に入ってからパソコンの方が得意になった。
- ・文字や画像の編集など、パソコンを使い始めてから逆にスマホに対して、パソコンのようにできたらいいな、と思うようになった。

測される (表 2)。しっかり作り込まれ、質の高い課題を提出する学生の割合もそれに比例しているからである。それにスマートフォンが得意と答えた学生全員がその理由として、「一日に使う時間が長いから」と答えている点からも、パソコンにも

より経験値を増やすための環境を提供することで、多くの学生にも利便性意識を高められるのではないかと考える。

また同時期に本学こども学科 1 年生を対象とした授業「情報基礎演習」でもパソコンの理解度についてアンケートを行った (クラス回答者 48 名)。授業ではペイントソフトによる画像編集や、Word によるお便り、園だより作成、PowerPoint による報告プレゼンや幼児向けコンテンツ作成を行った。「パソコンに自信がついたか」の質問に対し、9 割の学生から「自信がついた」「今後保育で必要となるスキルを身につけることが出来た」という回答を得た。そのほとんどが「パソコン (Word・PowerPoint) の事をさらに学びたい」、「もっと便利な機能を知りたい」と付け加えている。その反面「パソコンでわからない事はどのようなことか」の質問に対し「自信がない」、「わからないことがわからない」や、「わからない事を言葉で説明することができない」と答えた学生が 10% あった。この結果は、現時点では卒業後の現場においてパソコン活用のイメージがしやすいこども学科学生の方がパソコンに対する向上心を強く持つことができるということであろう。

パソコンを活用するためには、スマートフォンを利用したアプリ活用やソーシャルメディア活用ではほとんど必要がないファイルやフォルダの概念や Windows の知識が必要となるが、この部分の理解が乏しいことから、パソコンを活用できる状況に至っていないと思われる。そのあたりの知識は個人所有のパソコンを自由にカスタマイズすることにより、自ら調べ学ぶことによって自然と身につけていくものである¹⁾。

3. 昨年からの継続課題について

オフィスワークコース学生の資格取得意識は高い。本学では様々な分野の資格取得が可能であるため、入学時の目的の大きな一つである。ワープロ検定、表計算検定、データベース検定においてはそれぞれ年 3 回実施しており、1 年生にとってはモチベーションが高まる位置づけの検定となっている。従来までは年 2 回であった所を本年度から 1 回増設した。資格取得を取りこぼした学生数が増えたことへの対応策である。

Excel を使う授業「ビジネス情報演習 I, II」は情報強化科目として前期週 2 回、後期週 1 回開講している。入学直後の学生は、Excel 操作に大きな不安を抱きながら授業に臨むが、初学者も経験者もゆっ

くりゼロから学ぶことにより、7月の検定ではほぼ全員が2級以上から受験できるレベルまで到達し、よい結果を出している。入学当初、学生からは「文字入力のみ Word なら上級検定取得の自信が持てる」の声が聞かれるが、キーボード入力に加え、複雑多岐に渡る Word の操作に苦戦し、思うような結果を残せなかったワープロ検定より手ごたえのある Excel なら上級検定取得が狙えると意識が逆転する。

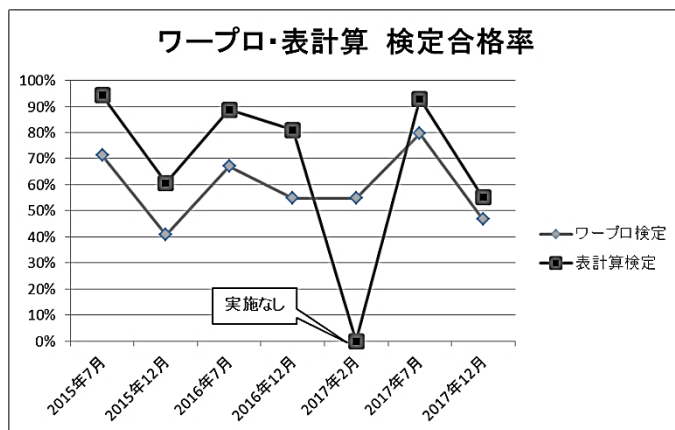


図2 検定合格率の比較

しかし近年、7月の表計算検定も少しずつ合格率が低下しつつある。さらに月別の結果を比較すると、2016年を除く12月の合格率が急激に低下している(図2)。ここには2つの問題が隠れている。その一つとして学生の取り組み姿勢の変化がある。数年前は課外の検定対策指導を求めてきたり、理解できるまで研究室に夜遅くまで通い詰めたりする学生が非常に多かった。しかしここ2年ほどはそのような学生がほとんどいないことである。対策練習を促すとほとんどの学生は「慣れればできるから大丈夫です」という言葉を返してくる。これはスマホ操作を習わずして使いこなせていると考えているように、使っていればなんとかできるだろうという、スマホネイティブの特徴ではないかと考える。しかし、検定合格には、自己流では合格することはできない。時に講師を頼り、パソコンに向かう時間を増やし、正しく効率よく何度も練習を繰り返すよう、根気よく指導をしていく必要がある。

二つ目の問題は、以前から筆者が課題としている「Excelの苦手意識を取り除けない学生の輩出」である。入学後、全体的にはExcelの能力が上がり、得意と感じる学生は多い。筆者の授業ではティーチングアシスタントを配置して個別対応を強化しているが、様々な問題から理解できないままの学生が少数でてしまう。7月の検定で結果が出なかった学生が12月の検定でも結果が出ない、また7月の検定でかろうじて合格できたがExcelをしっかりと理解できていない学生が12月の上位級には対応できず、不合格に転じる。ワープロ・表計算検定は1年次の受験がほとんどとなるのだが、こうした苦手意識を持ったままの学生が2年次最後の検定まで受験し続けるのだが、残念ながら合格できないまま卒業を迎えてしまう。この流れが合格率の低下に影響を与えているのである。また、このことに加え、1年生は2度目の受験となるため、「慣れればできるから大丈夫」というスマホネイティブ問題(能力の過信)も影響している可能性もある。

こうしたWord、Excelなどのソフトのスキルアップと合わせて、パソコンが苦手という意識を持たせる原因の1つであるファイル管理の理解を高めていくことにも指導を強化する必要がある。

3. ファイル管理の強化

学生からの質問事項や意見の中から特に重要視しなければならない項目は、ファイルの管理である。筆者の所に一番多く持ち込まれた相談(トラブル)が「保存したファイルが突然消えた」と泣きついてくるケースであった。パソコンのアプリは使えても、ファイルに関する知識が乏しいことから、ファイ

ル管理ができていないという点である。ファイル管理の概念がしっかり理解できていれば、このようなことが起こることはないといえる。つまり、ファイルを操作し、管理することこそパソコンを使いこなすということだと言える。

パソコンの内部にはワープロで作成した文書や、表計算ソフトのデータ、そして、アプリも実行可能なプログラムファイルとしてハードディスク内に保存され、管理されている。そして、ハードディスクの中は、「フォルダ（ディレクトリ）」に分けて、きちんと整理整頓されている。プログラムファイルを入れるフォルダ、ワープロ文書を保存するフォルダ、というように目的別や種類別に、整理され管理しなければならない。そこはスマートフォンも同じである。撮影した画像や動画を再利用するヘルプを求められることも多い。しかしそれがどのような仕組みで保存されているのか理解できていない学生も多い。自動生成されたフォルダ名とファイル名に不可解を感じ、その膨大さに面食らい、目的のファイルを見つけられずに終わるケースも少なくない。

授業においても、インターネットを使ってダウンロードしたファイルを利用したり、ホームページを作成するために必要なファイルをコピーしたりするためには、Windows がどのようにファイルを管理しているか、目的のファイルがディスクのどこに保存されているのかを知る必要がある。しかし、ダウンロードしたファイルがどこに保存されたかわからない、作成したファイルが見つからないといった、質問を受けることがよくあり、各学生に割り当てられたネットワークドライブ上のフォルダを確認すると、煩雑にファイルが保存されている状態が見受けられる。ファイルを保存するときに、ファイルがどのフォルダに保存されようとしているのかを確認することなく、保存を実行しているため、このようなことが多々発生していると思われる。

しかしパソコン経験値の少ない学生にとって、パソコン内部のディレクトリ概念は正直敷居の高いものになる。管理意識を高めるための具体策として、データファイルのバックアップの徹底の指導が有用と考える。提出課題の入った USB メモリが壊れたため、課題を1から作り直すことになってしまった事例や、複数人で分担したファイルを1つの課題として仕上げ、結果を発表するというグループ課題では、作成途中の課題を入れた USB メモリを持っている学生が休んだため、作業ができなかったり、発表当日課題を入れた USB メモリを忘れてしまった事例がある。これらの事例は全学科コースすべてで複数ケース発生しているため、重要視すべき問題である。バックアップを取る、ファイルを複製するという単純作業であるが、これが重要であるということ、また、複製の方法、ファイル名の命名ルール、上書き保存の方法など一つ間違えるとデータを失うことになるということを、今後も授業内で根気よく繰り返し指導しなければならない。ビジネスにおいては、データは資産である。こうした意識をしっかりと身につけさせていきたいと考える。

4. まとめ

本学は平成30年度より、クラウドコンピューティングを利用した教育支援システム manaba²が導入される。インターネット環境でパソコンやスマートフォンを利用しながら学べる環境が可能となる。教員側からの課題配布や、学生側からの課題提出を中心に、充実した学習が可能となることにより学生のパソコン稼働率に加え、仕事で不可欠となる Word・Excel・電子メール等の利用率も上がるよう、

連携した有意義な活用方法を検討していく必要がある。上記の結果からもわかるように、スマホネイティブ世代である学生のパソコン経験値は少なく、パソコン知識が乏しい。授業の目的を明確にし、狙いにぶれがない利用方法を構築しなければならない。そのためには、即戦力となる人材育成を指導の軸とし、時代に流されることのないパソコン活用の基本を根気よく丁寧に指導することが必要である。学生の主体的な学びを期待しながら、授業を通してきめ細かなフォローを行っていきたい。

参考文献

- 1 川喜田多佳子 (2016) 「IT コンシェルジュ実践報告 (その 2)」『高田短期大学紀要』第 34 号, p.107
- 2 川喜田多佳子 (2013) 「表計算科目の教授法についてーやる気と自信を導く「講師力」」『高田短期大学紀要』第 31 号, p.169
- 3 manaba 朝日ネット (<http://manaba.jp/>)